

保健行動の実行要因に関する研究 - 心理社会的側面からの考察 -

著者	相磯 富士雄
号	1883
発行年	1987
URL	http://hdl.handle.net/10097/20026

氏 名（本籍） あい そ ふ じ お
相 磯 富 士 雄

学 位 の 種 類 医 学 博 士

学 位 記 番 号 医 第 1 8 8 3 号

学位授与年月日 昭 和 6 2 年 2 月 2 5 日

学位授与の要件 学位規則第 5 条第 2 項該当

最 終 学 歴 昭 和 3 2 年 3 月
東北大学医学部医学科卒業

学 位 論 文 題 目 保健行動の実行要因に関する研究
— 心理社会的側面からの考察 —

（主 査）

論 文 審 査 委 員 教 授 久 道 茂 教 授 池 田 正 之

教 授 藤 咲 暹

論文内容要旨

はじめに

健康増進や慢性疾患の予防および悪化の防止のためには、日常のライフスタイル等健康保持のための日常生活行動のあり方が重要になってきている。そのために、セルフケア、コンプライアンスにかゝわる保健行動の実行に関係する諸要因についての、とくに心理社会的要因についての研究が重要である。そのため、筆者らは、人工透析患者等難治性の慢性疾患患者のセルフケア行動について調査研究してきた。

本論では、地域住民の健康増進、疾病予防のためのセルフケア行動、および陳旧性心筋梗塞患者・労作性狭心症患者のセルフケア行動の2つの事例に関して、同行動の実行にかゝわる各種要因について心理社会的側面からの研究を報告する。

研究目的

本研究の目的は、セルフケア行動等保健行動に関して、その動機形成要因および、動機づけられたセルフケア行動の実行を促す、諸要因について、心理社会的側面より検討し、それら要因と保健行動の実行との関連を総合的に把握することである。その手法に関して社会統計学から援用することによって、セルフケア行動とこれら要因との関係および、これら要因間の相互関係を数量的に表現することに焦点をしばった。

研究方法

(被調査対象者と調査方法)

事例一は、東京都近郊ベッタウン地域の生活協同組合員20才以上の男女742名(回収率81.3%)。事例二は、4都県にある8病院に通院中の69才以下の男子で、陳旧性心筋梗塞患者179名、労作性狭心症患者94名である。調査者立会いのもとでの質問紙調査法による。

(分析枠組) 行動にかゝわる動機形成と、動機から行動の実行への促進に関する、行動一般の理論を基に、保健行動に関する各種心理社会的要因についての理論、説を取り入れ、仮説とした。すなわち、セルフケアのための行動の動機形成に関連する要因として、「疾病一般に対する自己の脆弱性意識」疾病によっておこり得る身体的、社会的に重大な諸結果についての意識」「日常的な生活における保健関心の高さ」嗜好などの「保健感覚」「習慣」,「保健規範意識」等、また保健行動の実行を促す要因としての「自己管理態度」、悩みや葛藤のある場合の「対処の仕方」、タイプAなどの「行動特性」「生き甲斐」「社会的支援ネットワーク」等である。

(分析方法) 本調査結果で得られる変数は、名義尺度、順序尺度であるので、ダミー変数を用いた回帰分析の処理ができるようにした。次に各変数を測定し、その測定値について主成分分析をおこない、かつ信頼性係数を測定し、測定値の安定性を確認した。次にこれら変数間の相関係数を求め、さらに、被説明変数としてのセルフケア行動と、説明変数としての上記要因との因果関係を求めるため、重回帰分析をおこなった。さらに変数間の因果順序を求めるためにパス分析を用いた。

結 果 と 結 語

① 「日常的な生活行動の中で保健行動を優先する態度の人」、「生活上の不安や悩みに対して逃避することなく、積極的に対処する行動をとる人」、「健康問題に対して規範意識の強い人」、「生き甲斐のある人」、「家族・友人からの情緒的支援ネットワークを多く保有している人」は、食事、休養・睡眠、運動等にかゝる予防的保健行動を、有意に多く実行している。これは、地域住民の予防的保健行動の調査から明らかにされた関係であるが、慢性疾患患者一般にも共通と考えられる。

② 日常的な生活行動の中で保健行動を優先する態度は、入院経験があったり、自覚症状があることにより、自己の疾病一般に対する脆弱性意識の強い人に多い。しかし、一方ものごとに積極的に対処行動をする人のように積極的、主体的な人も多い。すなわち、この積極的対処行動をする人は、自己の健康管理態度が主体的である人や、情緒的支援の多く保有している人、生き甲斐のある人と高い相関関係がある。

③ 労作性狭心症患者では、生き甲斐がない人や自己管理態度が依存的な人が、セルフケア行動を実行していない。一方、情緒的支援のある人は実行している。労作性狭心症患者や人工透析の患者など長期のセルフケアを必要とする難治性の慢性疾患患者に共通である。

④ タイプA行動特性の陳旧性心筋梗塞患者は、きわめてよくセルフケア行動を実行している。他の心理社会的要因の影響は少ない。タイプA行動特性という強迫的な行動指向による食物摂取の工夫などは、工夫すること自体によって、虚血性心疾患を悪化させる要因になり得る。タイプA行動特性を軽減させるようなカウンセリング技術の開発等の対策、研究が必要である。

審 査 結 果 の 要 旨

健康増進や慢性疾患の予防および悪化の防止のためには、日常のライフスタイル等健康保持のための日常生活行動のあり方が重要である。そのために、セルフケア、コンプライアンスにかかわる保健行動の実行に関係する諸要因についての、とくに心理社会的要因についての研究が重要である。

本研究は、地域住民の健康増進、疾病予防のためのセルフケア行動、および陳旧性心筋梗塞患者・労作性狭心症患者のセルフケア行動に関して、その動機形成要因、および動機づけられたセルフケア行動の実行を促す諸要因について、心理社会的側面より検討し、それら要因と保健行動との関連を総合的かつ数量的に把握することを目的としておこなわれた。

その結果、(1)「日常的な生活行動の中で保健行動を優先する態度の人」、「生活上の不安や悩みに対して逃避することなく、積極的に対処する行動をとる人」、「健康問題に対して規範意識の強い人」、「生き甲斐のある人」、「家族・友人からの情緒的支援ネットワークを多く保有している人」は、食事、休養・睡眠、運動等にかかわる予防的保健行動を、有意に多く実行している。(2)日常的な生活行動の中で保健行動を優先する態度は、入院経験があったり、自覚症状があることにより、自己の疾病一般に対する脆弱性意識の強い人に多い。しかし、一方ものごとに積極的に対処行動をする人のように積極的、主体的な人も多い。すなわち、この積極的対処行動をする人は、自己の健康管理態度が主体的である人や、情緒的支援の多く保有している人、生き甲斐のある人と高い相関関係がある。(3)労作性狭心症患者では、生き甲斐がない人や自己管理態度が依存的な人が、セルフケア行動を実行していない。一方、情緒的支援のある人は実行している。(4)タイプA行動特性の陳旧性心筋梗塞患者は、きわめてよくセルフケア行動を実行している。他の心理社会的要因の影響は少ない。タイプA行動特性という強迫的な行動志向による食物摂取の工夫などは、工夫すること自体によって、虚血性心疾患を悪化させる要因になり得る。タイプA行動特性を軽減させるようなカウンセリング技術の開発等の対策、研究が必要である、と結論された。以上の論文は、従来から知見の少なかった保健行動の評価の視点を明らかにし、行動科学領域の発展に寄与しうるものとして学位の授与に値するものと認める。